◆最優秀賞◆

「多様性」を考える

真土小学校　六年
熊澤　寿歩

この頃、多様性という言葉をよく耳にする。辞書で調べてみると、「多様性 diversity 生物的に多様であることの総称。」と記されている。考え方はとても広いけれど、「個人のちがいを認め合い、尊重し合う」ということも多様性というそうだ。

多様性の考え方に、私は賛成だ。人にはそれぞれ得意不得意があるし、十人十色という四字熟語があるのも多様性を認めるということだろう。例えば、野球部だから坊主頭にする、というような考え方がある。そういう文化だから、いやだと思ってもそれに従うのが当然で、そこからはみ出ることはなかなか考えられない。でも、それがいやな人はモヤモヤしたり苦しいこともあるだろう。「〜するべき。」とか、「〜でなければならない。」という考え方の中で生きるのはきゅうくつだ。そう考える人が世界中で増え、一般的になったのではないか、と私はそう考える。

私が思いつく一番大きな多様性は、障がいのある人たちだ。以前、障がいのがいは「害」だった。今は「がい」と書く。「害」の否定的なマイナスイメージをやわらかくするためだそうだ。調べてみると、日本政府が共生社会を目指す障害者施策の中で、二〇〇六（平成十八）年に「障害」に係る「がい」の字に対する取扱い、を発表している。障がいのある人もない人も共に生きる社会の実現のためには、大切な考え方だと思う。それまで、障がいのある人＝かわいそうな人、という考え方が多分一般的だった。でも今は、障がい＝個性、と考える時代だ。マイノリティの人たちを救う大きな一歩、これは多様性だ。

多様性という考え方にメリットは多い。しかしここで、デメリットについても考えなければならない、と私は感じている。私は今十一才だが、生まれた時からずっと多様性の中で生きている。その中で気になるのは、多様性を利用したルーズさだ。私たち日本に住む者は、「国民の三大義務」を負っている。しかし、多様性という言葉の下、その義務を果たせていない人が増えている。いやなことはないけれど寝坊したから学校を休む、とか、今日の仕事は面倒だから会社を休む、学校が勝手に提供する給食の費用を支払う必要はない、などがそれだ。他にも、考えるとキリがないほど色々と頭にうかんでくる。

現在は、日本も世界でも、多様性＝何でもあり、とかん違いしている人が多い印象だ。大正末期から昭和を生きた詩人、金子みすゞは言った。「みんなちがって、みんないい」と。あなたは、あなたそのままでいい。ということだ。この考え方は、多様性そのものだと思う。多様性がわがままを助長する社会は、みすゞがいうこととは違う。多様性＝自分勝手ではない。かん違いを正し、本当の意味の多様性を理解して、それぞれが生きやすい日本・世界であってほしいと、私は考えている。